

# Catherine Durning Whetham の信仰（教育）観

沖 塩 有希子

## はじめに

本稿は、Catherine Durning Whetham（1871-1952、以下では“Catherine”あるいは「彼女」と記述する）の信仰観や信仰をめぐる教育のあり方に関わるの見解を明らかにすることをねらいとしている。

上述のテーマを設定する理由には、これまでの研究とのつながりがある。筆者は過去に Catherine の教育観に関する論考<sup>(1)</sup>を行っているが、この拙論で示した彼女の教育観が形作られるに際しては、生育環境、社会的・文化的背景などが影響を与えているものと思われ、彼女の信仰（教育）観もそれら要因の1つとして作用していると推察されるため、信仰観や信仰教育のあり方についての検討も不可避の手続きと考えていることがある。

なお、今回の検討を進めるにあたっては、（教育観に関する拙論の時と同様に、）Catherine の自著である『娘の養育』（*The Upbringing of Daughters*, 1917年）を主要テキストに位置づける。同書は、一男五女の母親である彼女が46歳の頃に執筆したものである。表題は『娘の養育』とされているが、論及の対象は女子に限られている訳ではなく、男女双方の子どもの教育やしつけをその範疇におさめ、多岐にわたるトピックから展開されていることが特質の1つと言える<sup>(2)</sup>。

また、本論の目的は彼女の信仰（教育）観を把握することにあるので、『娘の養育』の中でも15章：信仰（religion）<sup>(3)</sup>に記述されている内容を重点的に分析していくことにする。

以降の論の流れとしては、I章では人間と信仰をめぐる Catherine の考察について、II章で子どもと信仰（教育）をめぐる彼女の考察に関して検討する。そして、III章において、（I・II章で明確になった内容を踏まえ、）Catherine の信仰（教育）観の特徴を提示することにしたい。

## I章 人間と信仰をめぐる Catherine Durning Whetham の考察

### (1) 人間にとっての信仰（生活）

Catherine が述べるには、人間は自らを過去から切り離すことができず、確固たるよりどころなしに自己を築き上げることができない。そうした存在であるがゆえに、人間にとって信仰は、現在および未来に向けた契約であるのと同時に、すでに確立された事柄や

(1) 拙論「Catherine Durning Whetham の教育観」『千葉商大紀要』第51号第2号、2014年、59-74頁。

(2) 『娘の養育』の書誌情報については、同上60-1頁を参照されたい。

(3) 『娘の養育』、221-36頁

永久に存続する事柄についての偉大な備忘録でもあるという。

また、人間の傾向として一般的に言われるのは、元來信心深く、理解することに固執し、何かを信じるの方が信じないことより容易であることである。そして、そのような氣質を備えるために、人は遅かれ早かれ信仰心に目覚めるもので、自らの信仰のよりどころを、言語や行動によって、肯定的もしくは否定的に吟味するようになるのであり、プロテスタントであろうとカトリックだろうと、ここに真の信仰生活が始まると彼女は述べる。

人間の信仰の歴史について彼女が説明するところによれば、その沿革は古く、人は神の発見ないしその創造に多大な時間を費やし熟考を重ねてきたのであり、また、精神世界と物質世界の2つの異なる世界に何らかの交流手段を確立するべく長年力を尽くしてきたという。太古の昔から現在に至るまで、信仰の対象<sup>(4)</sup>は地域ごとあるいは社会の進化の度合いに応じて多種多様で、時代や世代によって精神世界と物質世界のいずれかが優勢となるが、両世界とも存在しており、人間は生涯にわたって何かしら崇拝するものであると彼女はいう。

そうした人間の信仰の中でも、組織化された信仰 (the organized religion) というのは、「人間の絶え間ない努力の産物である」と彼女は表現する。人間は、信仰と生活を結びつけて一貫性や意義を与えたり、さまざまな段階や経験について解釈したり、個人の進歩の成果として得た立場を磐石なものとしたり、最終的にはこの世における個人の生活を周囲の生活と関連づけることを通じて、より充実し完全な人生を目指してきたと彼女は述べる。

祖先からの組織化された信仰を継承し、その教義や典礼——これらは、可視と不可視、既知と不可知の連絡を図る経路として整えられてきた——を役立てることのできる人は幸いであるとも彼女は言う。理由として、そのような人は宗教上いかにあるべきかをめぐって混乱をきたすことがないからとしている<sup>(5)</sup>。

なお、信仰に絡んで Catherine が懸念している点には、信仰の本来の傾向は人間の社会を組織・統制するように働くもので、この組織・統制は、傑出した有力な少数のためでなく、忍耐強いその他大勢——彼らの理念・高潔・生活状況が文明の成功・失敗の真の基準となる——のために行使されるものであるのに、近代的な生活を営む自分たち世代にはそうした組織・統制が働いておらず、社会化の要素が欠けており、それが自分たちの不安をかき立てているということがある。彼女が述べるに、個人の発達は自らの利益に基づいており、往々にして本質的に反社会的で反宗教的なものであるから、組織化された信仰の第一歩というのは、それがいかなるものであろうと、人々が団結し、それぞれの生命とエネルギーの一部を共通の理念の実現に向けて宗教的立場から正当化することに置かれるのであって、どんなに原始的な一団だろうと、いずれの社会においても、利己心や自己防衛を制限して人々が団結する信仰の基盤を備えているもので、「団結する」ことにこそ信仰の神髄があると彼女は主張する。

(4) 信仰の対象の事例として、慣れ親しんだ聖霊、家族で信仰する神、部族の神、国家の神、悪霊、その他闇の力を持つ悪魔などを彼女は挙げている。

(5) ただし、この後の箇所が続いて、人間は祖先の作り上げた教義を頭で受け入れ、外面的には形式に従い、熱意を込めて頻繁にその教義を暗唱するかもしれないが、信仰生活上どういった人間が偉大であるかを直観的に理解できる人はいないとも彼女は述べている。

## (2) 信仰に関連する先行研究分析

Catherine は、『娘の養育』の中で自分自身の信仰観を論じるに際して、関連する先行研究をしばしば参照・引用している。

この点に絡んだ彼女の記述を挙げてみるが、信仰に関わる歴史や思想についての研究は長年にわたって蓄積されており、様々な教義・形式の起源や価値に関して継続的に議論が重ねられてきているが、とりわけ信仰の進化をテーマとする研究から、儀式が教義に先行すること、崇拜やいけにえの慣行は使徒信条や十戒よりもはるかに古いものであることが解明されているという。

他の先行研究には、一部の心理学者が主張するものがある。これによると、さまざまな祈りの姿勢・儀式、神への崇拜と関わりを持つ色彩・光景・香りなどが、非常に強力に信仰心を誘引する<sup>(6)</sup>といい、こういった知見より、肉体と精神が密接につながっているのは明らかで、万人が認める紛れもない事実であると彼女は述べている。

また、彼女いわく、信仰形態には、たとえ無自覚であるにしろ一定の心理的ねらいが含まれており、ある時点で人々が必須であるとみなした信仰生活の様相を後世に伝えるためにそれぞれのやり方で力を尽くしてきたのであり、各々の信仰形態についても彼女は細かく説明している。その信仰形態の1つ目には、信仰の背後にある象徴や意図が自分たちの見方とは異なるため、それを視野に入れない信仰の形があるという。2つ目は、ある信仰が持っていた本来の概念は失われたものの、長く用いられてきたことで象徴が神格化され、以前にそれを信仰した人々とは別個の見解や経験を持った人たちによって崇拜の対象とされる状況となり、結果として違った外見・出自の人から信仰される形もあり得るという。3つ目としては、かつて神聖視されていた形態が伝承されなくなり、その意味するところが不明瞭になりつつあるが、その信仰の概念ははまだ重んじられている信仰の形もあるという。

さらに彼女は続けて、いかなる信仰形態であっても先行する研究が共通に指摘している点は、信仰生活の顕現 (manifestation of religious life) というのが驚くほど永続的で人々に深く根づいており、全てに意味と効用が備わっていることであると述べる。加えて、人間が自分たちに見合った信仰を持って存在する限り、たとえ外面的な表現形式が世代ごとに変容したとしても、その理念が消滅することはなく、めったに変更されることもないという。典礼は新たな要素を取り入れたり作り直され、教義は盛衰をたどりながら再解釈され、儀式もはやりすたりの過程をたどり、こうしたプロセスはさまざまな社会・国家・文明が継続的に発展させてきた内なる状態を外面的に表出している。が、個人の霊魂に関する精神の記録には驚くほど違いが見られないものであり、信仰の個人的・直観的な性質は普遍性を有しており、民族や時代の制約をほとんど受けないと彼女は主張する。

## (3) 聖書

Catherine は、自身の信仰 (教育) 観を論じる上で、当然ながら聖書についても言及している。

彼女によれば、大人は、問題を解決するにあたって、単純に「なぜ」ではなく「いかに

---

(6) ただし、これらのことが慣習化すると、迷信や祭司主義の傾向を帯びることも彼女は指摘している。

して」と複雑に問うものであり、自分の能力では解けない難題にぶつかった時には、造物主の神聖な言葉である聖書に喜々として立ち返るものだという。

そうした経緯より、聖書は「300年もの間、英国における神学と信仰のスタンダードの書」に君臨し続けてきたのであり、「たとえすべての登場人物や出来事がフィクションであるとしても、聖書はきわめて人間的で、真実味があり、教育的」なもので、「私たちの知的財産としてきわめて重要」との表現で彼女は聖書の意義を唱えている。

そして、旧約・新約それぞれの聖書に対する見解を示している。

旧約聖書は、傑出した人の信仰にまつわる成長、信仰と政治の相互作用、信仰上の理念をめぐる対立といった記録であり、経験や事例にあふれているので、いついかなる時世においても示唆に富み、将来に向けた助言も見出せるという。加えて、道徳性に関わる見識も旧約聖書は与えてくれるのであり、ふるまいの善悪について個人および公共の責務に力点を置いて段階的に導いてくれると彼女は述べる。

ところで、Catherineによれば、彼女が生きている時代は聖書に向けた人々の態度の変容期に該当しており、それにはこの分野の研究の進展が影響しているという。すなわち、信仰や儀式の起源に関する研究、心理学研究、ユダヤ民族の歴史と伝統についての研究、考古学やその他多岐にわたる重要な研究の蓄積が、自分たち世代の聖書のとらえ方に革命的变化をもたらしているのであって、信仰に関する研究ほどその観点が拡大あるいは変更され、知識が急速に高まり、大きな進歩を遂げた分野はないと彼女は述べる。

ただし、(先で触れたように、)信仰についての研究が飛躍的に進み、その知見に大幅な修正が加わる状況にあるとしても、旧約聖書は時代を越えて価値を持つと彼女は見ている。理由として、旧約聖書に登場する物語は、キリスト教において伝統的に重要な位置を占めてきたことや、ほとんどの芸術・文学に影響を与えている点を彼女は挙げている。そして、ユダヤ民族の古代史や英雄をある程度知り、彼らの冒険・伝説・神話が自分たち先祖の中でどれほど大きな存在を占めていたかを理解せずには、中世および近代の絵画・彫刻・詩を正確に把握することはできないと彼女は述べる。

次に、新約聖書についてであるが、これは旧約聖書以上に議論の余地があると彼女はコメントしている。というのは、新約聖書に対する人々の確信は絶大で批判的見解や研究は受け入れられにくいので、こうした事情から、新約聖書を子どもに提示する多様な方法を建設的に論じることは不可能であると彼女は主張する。

さらに、そのようなことわりの後に続けて、文明が進展したために、自分たちにあっては新約聖書に記された諸原理を看過する事態が生じているが<sup>(7)</sup>、仮にそうした原理が不快であるにしろ、自身が日常的に交流する人々や国においてそれら原理はいまだ効力があるとも彼女は述べている。

(7) 新約聖書に記された原理を見過ごしている具体的事例として、ヨーロッパ大陸の半分の征服者・開拓者である北西ヨーロッパ系の自分ら(大人)が、土着の神や英雄を完全に忘れ去っているにもかかわらず、子どもに向かって、3～4千年前に砂漠を放浪し、井戸や牧草地をめぐって争い、夜には星が輝くヤシの木の下で野宿をしていたアラブ系遊牧民のベドウィンについて満足気に話すことを挙げ、その奇妙さに彼女は触れている。

その上で、高速のヴァイキング船のかたわらから霧に包まれた北海を目を凝らして見つめ、幾多の荒波の危険をくぐり抜け、国家の栄光の礎を築くために船を走らせた熱意にあふれる金髪海の男たちのような自らの同族についても大人は語る必要があると助言している。

#### (4) 自然信仰 (natural religion)<sup>(8)</sup>

(3)で言及したように Catherine は聖書の普遍性や重要性を訴えるその一方で、聖書とこれを礎に構築された神学の制度が、太古の祖先による自然信仰を神聖なものとして意味づけていないことを指摘しており、その理由として、自然信仰を理解するには信仰観の転換が自らに迫られ、精神や道徳心の混乱を招く可能性があることを挙げている。

彼女は、とある人の「汝が読んでそれを理解できなくとも、いつか理解できる日が訪れるであろう。なぜなら、多くの信仰の謎は感知することでしか理解されないからである」との言葉を引き、先人は信仰とは本来知性に関わる事柄ではないと認識していたとする。また、彼ら先人が創出したあらゆる様式や装置というのは、肉体に閉じ込められている魂を解き放ち、精神的成長のための時間と機会を与えるものとなっており<sup>(9)</sup>、これは先人が人間性への並々ならぬ深い知識を備えていたことの証であるとも彼女は述べている。その上で、祖先が築き上げた深遠な思想を備えた自然信仰は、自分たち現代人が敬虔なる信仰生活を営む一助となるにもかかわらず、先人たちが残したそうした知恵を放棄することになってしまっているとも指摘している。

なお、子どもが聖書に接するにあたって大人が留意すべき点については、Ⅱ章(2)子どもに向けた親の信仰教育の箇所でも取り上げることにする。

#### (5) 巡礼

彼女は巡礼に関しても触れており、想像と感情にまだ訴えかけるとしてその有効性を説いている。人は過去のできごとと結びついた場所や、慈悲深く素晴らしい人物ゆかりの場所を訪れることで多くを学び取るものであり、精神的探究と肉体的活動を兼ねて最寄りのカテドラルで数時間瞑想することを目的に10マイルの道のりを歩くことの方が、ヤーマスやブラックプール<sup>(10)</sup>へ電車で1日かけて訪れることより有意義であるとして巡礼をすすめる。

ただし、水を汲むために向かう最寄りの井戸までの日常的な道の途中で聖人像を前に瞑想するか、それ以外の日々の往来で道端の十字形の記念碑や神聖な場所に祈りを捧げる機会が仮にあるとしても、自らの生活のあり様について顧みるのは難しいとも彼女は付け加えている。そして、そのような家事や平素のできごとを再び神聖なものにすることが差し迫って求められており、この実現こそが、自分たちに課された任務の負担軽減になるの

(8) “natural religion” は、一般に「自然宗教」と訳出され、その意味は、啓示の神秘性を否定し、自然や理性と両立する限りにおいて神を認めようとする立場 といったところである。

ただ、natural religion に絡んだ Catherine の見解から推察する限り、上記の意味よりは素朴なニュアンスで、自然を崇拝するといった信仰の形を指しているのとらえた方が妥当であると判断し、ここでは“natural religion”を「自然信仰」と訳すことにした。

(9) そうした信仰のあり方を先人がとるのに対して、彼女たち世代にあっては、一方に日々の禁欲を受け入れることで自身の信仰生活が向上すると考える人もいるし、他方には律儀に祝祭日を祝うことにより精神的に豊かになると考える人もいるという。

が、いずれにしても、教会が肉体的機能への統制・管理に影響をもたらす事柄に関心を払わなくなっていることが精神的な機能のゆるみにつながっているのは明白で、これは肉体的機能と精神的機能が連関していることが原因しているとも彼女は述べている。

(10) ヤーマス (Yarmouth) はイングランド東部ノーフォーク州の市・港町。

ブラックプール (Blackpool) はイングランド北西部のアイリッシュ海に臨む海港および海岸保養地。

と同時に、そうした任務に栄光を与えることができる唯一の手立てであるとも彼女は訴えている。

## (6) 神秘主義

Catherine は、信仰に向かう人間の精神状態は個人的かつ直観的であり、これは時代や民族を超越した普遍性を持つとしている。加えて、この点は「神秘主義」の名の下に知られるようになっており、今後ますます注目される概念になるとも述べている。

こうした見解や(5)で瞑想に価値をおいたコメントをしていることなどから推断する限り、彼女は、神秘主義——直観や瞑想により神と自己との合一や絶対的真理が得られるとする——を肯定的に見ていると考えることも可能である。

神秘主義の特質である神と自己との合一をめぐるのは、「あくまで自己における実地の体験、『実験』としてのみ与えられる」もので、「神の現前の実験的味得」といった定義もされている<sup>(11)</sup>ことから、直接的な体験性にねざすものと理解できる。

前回の拙論において触れたところであるが、Catherine がニューナム・カレッジ<sup>(12)</sup>在学当時主に学んだのは物理学や化学の分野であり、キャベンディッシュ研究所（ケンブリッジ大学物理学研究所）で学友とともに実験活動に勤しんだ学生時代を経験している<sup>(13)</sup>。なお、こうした成育歴も係わっていようが、彼女は著書『娘の養育』で実験・観察を介して物事を把握することの意義について繰り返し言及している<sup>(14)</sup>。そして、こうした見方に立つことからすると、彼女の中に神秘主義を受け入れる素地があると見なすこともできるであろう。

さらに、「神秘主義は神と人間との本質的な同一性を主張するため、原罪的な教育観から子どもを解放」<sup>(15)</sup>するベクトルへと向かわせるといった視点を鑑みれば、前回の拙論で論じ、本論においても取り上げることになる、子どもという存在を肯定的にとらえてその興味関心や発達特性に配慮しようとする彼女の（信仰）教育観と、神秘主義とに親和性を確認することも誤りではないだろう。

ただ、Catherine が神秘主義に対して共鳴する部分を持ち合わせている可能性があるとしても、彼女がニューナム・カレッジ時代に情熱を傾けた物理学や化学というのはあくまで科学性・合理性・客観性に貫かれた学問であり、神秘的体験としての合一を是とする神

(11) 小口偉一・堀一郎 監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1993年、437頁。

(12) ニューナム・カレッジ (Newnham College, Cambridge) は、ケンブリッジ高等地方試験 (Cambridge Higher Local Examination, ケンブリッジ大学入学の基礎資格といわれる地方試験の1種であるシニア [Cambridge Senior Local Examination, 中級学校卒業程度の試験に相当] よりもハイレベルの試験である) にパスできる力量を獲得させることを目指して女性対象の特別講義が開講されたことに伴い、1871年に受講生に向けた居住場所がリージェント通り74番地の家屋とされたことに端を発する。同カレッジの創設は、ケンブリッジ大学の道徳哲学教授 Henry Sidgwick (1838-1900) の尽力によるところが大きく、彼は、こうした女子高等教育の確立整備を、大学再生、および社会に対する大学の影響力を高めることを目的とするケンブリッジの大学改革の一環ととらえていた。

(13) Catherine のニューナム・カレッジ時代の学生生活の様相に関しては、拙著「イギリス19世紀末の女子教育をめぐる試論——ニューナム・カレッジを事例として——」『教育研究』第57号、2013年、128-43頁を参照されたい。

(14) この詳細については、拙著「Catherine Durning Whetham の教育観」、59-74頁を参照されたい。

(15) 教育思想学会 編『教育思想事典』勁草書房、2000年、432頁。

秘主義との齟齬は否めないで、彼女が神秘主義をどのようにとらえていたのか確たるところは現時点ではつかめていない。

## Ⅱ章 子どもと信仰（教育）をめぐる Catherine Durning Whetham の考察

### (1) 子どもに信仰心を涵養する上での親の留意点

Catherine は、自らのように子を持つ大人（親）とその子どもは、信仰をめぐる理念や顕現（manifestation）から逃れることはできないので、親はこれらに関して早急かつ真剣に考える必要に迫られていると述べる。加えて、親が自身の信仰上の成長にとらわれるあまり子どもに対する親としての使命を忘れてはならないとも述べており、さもなければ、古くさく陳腐な信仰の知識を前に子どもが途方に暮れるのを目の当たりにすることになりかねないとの警鐘も鳴らしている。

また、子どもの信仰の道筋<sup>(16)</sup>として親が期待すべきは彼らが通常のルートを進んでくれることであると、つまりそれは、希望と疑念、光と闇、失敗と進歩の道を彼らが歩み、知りたい導かれたいといった初期の欲求の後に悟性がゆっくりと成長を遂げ、霊的な感化（spiritual influences）や知識を受け入れる時間と機会を得られるよう、故意ないし過失による失敗の要素を徐々に減らしていくルートであると述べる。

さらに彼女は、子どもが信仰にどのように向き合うことを望むのか、親はその方針を明確にすべきとも訴えており、想定される方針についても詳述している。その方針の1つ目には、自分の子どもが信仰やその慣習を外部のこととして科学的・歴史的・芸術的な興味関心から学ぶというものであるという。2つ目には、親の信仰上の信念や習慣と関連づけて信仰に根ざした家庭生活を営み、自身の家庭を教会や社会に帰属させるものがあるという。3つ目としては、これら方針の中間路線を取るもので、親が子どもに向けて信仰教育を十分に行い、かつ儀式や礼拝に一定程度関わりを持たせることで、子どもは信仰上の直観（religious instinct）が発露する機会を与えられ、これによって子どもが遅い時期に信仰上の激変に突如遭遇することから守られるというものがあるといい、いずれの方針を親がとるのか決定を下す必要があるとしている。

なお、子どもの信仰に対して親がいかなる方針を持つにしろ、確かなことは、信仰教育やその実践から生じるあらゆる困難はいつの時代にも何らかの形で起こるものであるから、親は来る時に備えて折よく自己を鍛え対策を講じておくことが求められるとも述べている。

ところで、Catherine は、たとえ親が求めても、子どもの生活から自然信仰を取り除くことはできないとも主張する。その理由の第1としては、自然信仰は万人の心に潜在的に宿るものであり、人間の他の諸機能と同じように発達していくものであるからとする。親は、子どもの自然信仰を導いたり訓練することができるし、逆に台無しにしたり悪い方向へと誘導することも可能だが自然信仰を消し去ることはできないと述べる。第2の理由には自然信仰を通じて2つの効用——①経験の広がりや解明が促され、②生命の真実とその基盤としての自然が心に留められる——を獲得できることを挙げている。

(16) 子ども信仰の道筋としては、回心、突然の啓示、遅い年齢段階で完全な信仰生活に入るといった多様なケースの記録が確認できるが、これらは例外的であると彼女は述べる。

そして、キリスト教徒の場合、上記2つというのは、信仰生活と思想をたきつける聖霊が「あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」との約束の言葉（『ヨハネによる福音書』〈14:26〉）に集約されていると彼女は述べる。

このように、Catherineは、自然信仰を子どものパーソナリティー形成に欠かせない要素ととらえている。次の(2)の冒頭の箇所を取り上げることになる、直観や体験的行為に留意した信仰教育に絡んだ彼女の見解からしても、「世界に対する自発的で議論によらない宗教的反応、または教育の力をまたずに人間的経験のうちに発達する宗教性」<sup>(17)</sup>としての自然信仰に子どもが身をもって接することに対して、彼女が一定の価値を見出しているであろうことが推察される。

## (2) 子どもに向けた親の信仰教育

Catherineは、信仰に関わる豊富な知識が必ずしも真正なる信仰をもたらしはしないと認識しており、それゆえに親が知力を要する議論や歴史的論説を手段に子どもを信仰の世界へと導き入れる教育法に苦言を呈している。彼女いわく、親が子どもにしてやれる信仰上の教育とは、自分たちにとって物理的・精神的な意味での聖なる場所がどこであるのかを示すことであるとし、その際に聖地がどのような概念から成り立っているのか、それがいかなる働きをするのかといった論理的説明がつかないことについては、子どもが自ら答えを導き出すようにするべきと主張している。

加えて彼女は、信仰の本質とは直観であって、これは精神的なインスピレーションから生じるとしている。ただ、日々の礼拝や瞑想であったり、あるいは信仰生活こそが真実の生活で目に見えない世界に実在するものだけが唯一価値があると見る人との交流を通して直観の発達を促されると述べている。

彼女はまた、人間がこれまでに取り組んできた冒険的な企ての中でも、人間の精神と人間を取り巻く環境（目に見えるものと見えないもの双方を含む）の関係性の探求こそが最大にしてもっとも複雑であると言及もしており、こうした探究は自分たちがそれぞれに更新できるものであるから、自らが新しい見方や発見を求める境遇に置かれることもあるかもしれないとコメントしている。

さらにCatherineは、教会組織と無関係との事情から教会がとり行う事柄に参加できない家庭の信仰教育にも着目し、教会が提供する規律や教えに代わる手立てとして『自然の書』(*The book of Nature*)<sup>(18)</sup>等々の書物を活用することを提唱しており、『自然の書』を

(17) ジョン・R・ヒネルズ 編 佐藤正英 監訳『世界宗教事典（新版）』青土社、1999年、185頁。

(18) 『自然の書』とは、トマ・ド・カンタンプレ（Thomas de Cantimpré, 1201-1272、現在のベルギー・ドイツ・フランスを活動域とした）の著した『事物の本質についての書』（*Liber de natura rerum*）を底本とし、コンラート・フォン・メーゲンベルク（Conrad of Megenberg, 1309-1374、ドイツのカトリック聖職者・学者・作家）等が自由なアレンジを加えたものであるという。

コンラートが著した『自然の書』（*Das Buch der Natur*）は8章構成であり、1章：人間とその一般的本性について、2章：天と7個の惑星について、3章：動物一般について、4章：木々について、5章：草について、6章：宝石について、7章：金属について、8章：摩訶不思議な源泉についてから成る。

ラテン語を解しない一般庶民に向け、自然科学の知識を提供することを目的にドイツ語で執筆されたために好評を博し、多くの写本が生み出されたという。



信仰教育の教材に位置づけることの妥当性に関して次のように論じている。彼女は、自然に対する神秘的な念や、人間とこれを取り巻く自然とが互いに依存し霊的な交わりが起こるといった考えは、無数の神話・祭儀の起源となっていることにまず触れている。また、初期の儀式の多くは、自然の働きを理解しこれを促進するために、もしくは人間にとって不都合な影響を阻止することをねらいに生み出されたものであったと述べる。そして、後に文明が進歩した成果として、人間は自然の種々のプロセスを解明できるようになり、自然の働きのほとんどについて自分たち（人間）が把握・調整可能な要因によるものだととらえられるようになった。しかし、根本的な作用因についてはいまだ論理的に完全な理解に至っておらず、物質とエネルギーの相互作用との説明が現段階での究極の解釈とされるに留まって、これが最終的な承認を得ている訳ではない。したがって、こうした考察を経る中で人間は自然に作用する摂理の観念を抱くのであり、自己の内なる良心の理解と摂理の理解とが対等のものとして結びつくようになると彼女は主張する。

なお、彼女は、子どもにあっても、祖先が森羅万象をめぐって信仰の点から明確にしようとした問題にいずれ疑問を抱くようになるとし、そのような時期が来たなら、大人は、子どもの思考力・理解力に応じて、生と死、成長と衰退、太陽と嵐、善と悪といったテーマについて自然主義的な比喩（naturalistic metaphors）を用いて解説するのが最善であるとの理由から『自然の書』などの活用を助言する。ただし、地上と天国や光と闇を創造した神については、子どもがおのずと考えるよう仕向けていく必要があると述べている。

彼女が、信仰教育にふさわしい教材として『自然の書』の他に例示している書物としては、アンナ・レティシア・バーボールド（Anna Letitia Barbauld, 1743-1825, イギリスの詩人・批評家・評論家）の著『子どものための散文による賛美歌集』（*Hymns in Prose for Children*, 1781年）とマーガレット・ガティ（Margaret Gatty, 1809-73, イギリスの作家・編集者・日時計研究者）著『自然寓話集』（*Parables from Nature*, 1855-71）があり、これらに勝る本<sup>(19)</sup>はないと高く評価している。というのも、それらの書には美しく適切な絵の挿入といった工夫が凝らされており、そうした直接的かつ断定的な手法の方が、子どもの特性上受け入れられやすく理解が進むと彼女は述べる<sup>(20)</sup>。

当然ながら、Catherine は、子どもの信仰教育にふさわしい教材として聖書も挙げてい

---

（荻野蔵平「コンラート・フォン・メーゲンブルグ『自然の書』（第3章：動物）〈前編〉」『文学部論叢』104号、2013年、89-105頁）

(19) 『子どものための散文による賛美歌集』は、夫とともに非国教会派の寄宿舎学校の経営にあっていたアンナが、当時の学校用テキストに飽き足らずに執筆したもので、出版後にたちまち人気を博したという。

（ジェニファー・アグロウ 編纂日本語版監修 竹村和子『マクミラン版 世界女性人名大辞典』国書刊行会、2005年、332-3頁）

『自然寓話集』は、5連作で構成され、第1・2作はマーガレット自身が、第3～5作は娘たちの手によるという。

その内容は、自然を科学的に観察する視点と宗教的な視点が結びつき、子どもが神と直接に関係を取り結ぶことが可能であるとのマーガレットの信念に基づいたものになっているという。

同著作は出版直後にイタリア語・ドイツ語等に翻訳されており、その人気が看取されるという。

（松田美作子「Margaret Gatty, *Parables from Nature* とヴィクトリア朝期エンブレムの復興 —— “A lesson of Faith” を中心に」『成城イングリッシュ・モノグラフ』第40号、2008年、412頁）

(20) ちなみに、大人は、非常に複雑に考えてこれら著書の内容を疑問視するかもしれないが、そうした躊躇は大人特有のものであるとも彼女は付け加えている。

る。そして、子どもを聖書に向かわせる際の親の留意点として、子どもが批判的かつ詳細に物事を学ぶ発達段階に達したなら、科学的で現代的な教育方法を親は適用する必要があるとし、この点についてさらに踏み込んで述べてもいる。具体的には、例えば、『創世記』が最古の編纂物であり、モーゼの十戒がユダヤ民族が遊牧をしていた時期に属しているかのごとく時代錯誤的に教えられ、子どもに無知と誤解を招いてはならないことや、ユダヤ民族の信仰をさらにさかのぼると、人類にとって太古の信仰上の組織やその思想が『士師記』と『サムエル記』の一部に記述されているとの聖書の編纂の事情も見られることから、子どもが間違った理解に陥いらぬよう親が聖書の扱い方に注意を払うことを助言している。

同時に、共同体や社会の進展、商業主義の流入、共有地の囲い込み、家父長的で封建的な慣習の衰退といった聖書での記述に関して、近代史や自分たちの周囲で起きているのと類似する事象と結びつけることの大切さも彼女は説いている。なぜなら、子どもは、聖職者や預言者に対して、社会や信仰上の改革者、狭量なピューリタン、政治に関わる鋭い先見者や政治家、傑出した教師や指導者、権力と金に貪欲な役人などと並んで関心を寄せる<sup>(21)</sup>ものなので、そうした子どもの性質に即し、歴史や現代の出来事とリンクさせて旧約聖書を教え示す方法が良いとする。

また、彼女いわく、近年旧約聖書に関連する研究が活況を呈しており、パレスチナやその近隣諸国での発掘の報告書が毎年発行され、多くの日刊・週刊の誌面で重要な発見の記事が掲載される状況が生じていて、親世代が20~30年前の教科書から得た旧約聖書の知識が適切でないことは明瞭になっているという。ただ幸いなことに、一連の優れたハンドブックが出版されていることから、親はそれらを入手して子どもの導き手となれるレベルの知識を身につけることができることも述べている。

### Ⅲ章 Catherine Durning Whetham の信仰（教育）観の特徴

本章では、Catherine の信仰（教育）観の特徴について考察を加えていくことにする。

1つ目として、信仰（のあり方）をめぐって、彼女自身の信仰上の立ち位置、特定の宗派、あるいはこれが包摂する教義に拘泥することなく、中庸を保って抑制的に論を展開している点を挙げておきたい。

Catherine は、先人たちの信仰生活に目配りする歴史的視座を備え、また先行研究も参照・分析し、それら内容を適宜引用することで傍証を固め、俯瞰的・客観的に自らの信仰（教育）観を論じている。こうした手続きを踏むことによって彼女の論考は、さしたる根拠もなしに自説を主張する意見文とも、自己の体験や伝聞を下敷きに信仰（生活）やその意義を物するエッセー（随想）とも一線を画す仕上がりとなっており説得力を持たせることに成功していると思われる。

2つ目に、信仰（生活）のあり方は唯一無二でなく、各人の判断・選択にゆだねられると Catherine が認識している点が挙げられる。

(21) その他に、信仰に絡んだ子どもの興味関心の対象について、彼らはたいてい信仰の外面的な形態や装置——教会・儀式・聖職者の服装・鐘・安息日のしきたりなど——にまずは引きつけられるとも彼女は述べている。

これに関連する事例としては、Ⅱ章(1)において、子どもが信仰にいかに向き合うことを望むのか、親自身がその方針を見極めることの大切さを彼女が唱えていること、そして、想定される3通りの方針を示していることを取り上げたが、この記述箇所などから、彼女が信仰(生活)のあり方、信仰教育の道筋、手立てに絶対はなく、親自体の信仰観や子どもの特性・発達を照らし合わせながら信仰(生活)の理想形が追求されるべきととらえていたであろうことが推測できる。

ただし、付言しておくが、彼女は、親が子どもの信仰(生活)やその教育に責務を負っていることは言明している。この点は、以前の拙論で指摘した彼女の教育観の一特徴でもある、子どもの教育の任は親が担うべき(逆に言えば、教育職としての教師に金銭を支払うのと引きかえに、親が子どもを教育する責任から免れることを非難している)との主張<sup>(22)</sup>とも符合している。

3つ目には、親が子どもの信仰教育を行うにあたって、子ども自身の特質や発達段階を斟酌する必要性を訴えている点が挙げられる。この点もまた前回の拙論<sup>(23)</sup>で示したところであり、信仰教育面に限定されない教育全般を貫く特徴と言えよう。

彼女は、最善の教育は自らが与えるものに常に存在しているとみており、子どもにサポートとチャンスが与えられていれば、彼らに対して大人が働きかける以上に、効果的で徹底した教育を多面的に自然のうちに実現することができるとの考えを持っている。さらに、ほとんどの子どもは、本人の意のままにすれば無意識に適切な道筋で発達するとして、子どもの興味関心や子ども自身の活動にねざした教育こそが彼らの望ましい育ちと物事の正しい理解を導くものと彼女はとらえている<sup>(24)</sup>。

そうした子どもを主体に据えてその発達特性に意識を働かせる Catherine の教育観は、信仰教育にも無論あてはまる。Ⅱ章で触れたように、彼女は、直接的かつ断定的な手法の方が子どもに受け入れられやすく理解が進むとの理由の下に子どもに向けた信仰教育の教材を選定していたが、このような点は子どもの興味関心や発達特性に沿った教育に彼女が心を砕いていたことの証左といえよう。

4つ目として、信仰(生活)や信仰教育に際しても、子ども本人の実体験、もしくは具体的な事物を媒介させることで、物事を感覚的に把握させることの重要性を唱えている点が挙げられる。

この点も、やはり前回の拙論で示した内容と合致している。Catherine は、子どもになじみがあり興味を引きやすい具体的な事柄を学習の対象に据え、これに直に働きかけることから出発し、徐々に抽象的・科学的な事柄も範疇におさめながら理解を深めていく学びを推奨している<sup>(25)</sup>。

したがって、信仰教育の場合においても、巡礼や自然宗教といった子ども自身の生身の体験から直観的に学び取ることの大切さを彼女は主張するのであり、知識や議論でもって子どもを信仰の世界へと引き込むような教育法には否定的である。

---

(22) 拙著「Catherine Durning Whetham の教育観」、66-7頁。

(23) 同上、67頁。

(24) 同上、63-4頁。

(25) 同上、73頁。

## むすびにかえて

本稿においては、Catherine Durning Whetham (1871-1952) の信仰（教育）観を明らかにすることをねらいとして、彼女の著書である『娘の養育』(*The Upbringing of Daughters*, 1917年) を手がかりに論考を進めてきた。

I 章においては、人間と信仰をめぐる Catherine の見解に関して、(1)人間にとっての信仰（生活）、(2)信仰に関連する先行研究分析、(3)聖書、(4)自然主義、(5)巡礼、(6)神秘主義の6つの項目を設定し、おのおのについて検討した。

II 章では、子どもと信仰をめぐる彼女の見解について、(1)子どもに信仰心を涵養する上での親の留意点、(2)子どもに向けた親の信仰教育の項目を立て、それぞれ検討した。

III 章においては、I・II 章での検討内容を踏まえ、Catherine の信仰（教育）観の特徴に関して考察を加え、(1)信仰（のあり方）をめぐる、彼女自身の信仰上の立ち位置、特定の宗派、あるいはこれが包摂する教義に拘泥することなく、中庸を保って抑制的に論を展開していること、(2)信仰（生活）のあり方は唯一無二でなく、各人の判断・選択にゆだねられるものと認識していること、(3)親が子どもの信仰教育を行うにあたって、子ども自身の特質や発達段階を斟酌する必要性を訴えていること、(4)信仰（生活）や信仰教育に際しても、子ども本人の実体験、もしくは具体的な事物を媒介させることで、物事を感覚的に把握させることの重要性を唱えていることの4点を指摘した。

本稿の最後に、今後の課題を記して論を締めくくりにしたい。

第1に、『娘の養育』の分析検討を継続していくことがある。直近の作業としては、Catherine の家庭・家族・子育て・しつけ・家庭教育といった観点での論述に関してさらなる理解を目指すことがある<sup>(26)</sup>。

第2には、こうした作業と同時並行して、Catherine の教育観や子育て観が形成される上で作用した要因、すなわち、社会的・文化的背景、生育環境などを考察していくことがある。彼女が生きた時代状況や文化の様相といった点を射程におさめることにより、前回の拙論で提示した仮説——(1)Catherine が『娘の養育』執筆に取り組んでいたときに展開されていた教育の新たな動向（新教育運動と呼ばれる。近代的学校教育制度の画一性や子どもの自己活動を抑圧する教育のあり方を疑問視し、その代わりに、子どもの自由・主体性の尊重、自然の中での教育、生活と教育の結合といった教育理念と実践で対抗しようとした動き）が彼女の教育観に示唆を与えた可能性がある、(2)実験や観察といった活動の重要性を説く彼女の教育観には、祖国イギリスが過去から受け継いできた経験主義哲学が刻印されている可能性がある<sup>(27)</sup>——に対する一定の解答が得られるものと思われ、ひいては、Catherine の教育観・子育て観の概要とその形成過程を明確にすることができるので

(26) この作業においても『娘の養育』が主要テキストとなる。

わけでも、第1章：家庭の創造 (*The Creation of the Home*, pp.1-13)、第2章：家庭生活 (*The Life of the Family*, pp.14-27)、第3章：家庭でのつとめ (*Household Duties*, pp.28-43) の記述内容を中心に分析を進めていく予定である。

(27) この仮説(2)を検討していくにあたって、例えば、イギリス経験論者の一人であるロック (John Locke, 1632-1704) が執筆した『教育に関する考察』(*Some Thoughts concerning Education*, 1693) と『娘の養育』の記述内容の比較を試みる必要もあるかもしれないと考えている。

はないかと考えている。

(受理日：平成26年7月23日)

(校了日：平成26年9月8日)

## 〔抄 録〕

本稿においては、Catherine Durning Whetham (1871-1952) の信仰（教育）観を明らかにすることをねらいとして、彼女の著書『娘の養育』(*The Upbringing of Daughters*, 1917) を手がかりに論考を行った。

I 章では、人間と信仰をめぐる彼女の見解に関し、(1)人間にとっての信仰（生活）、(2)信仰に関連する先行研究分析、(3)聖書、(4)自然主義、(5)巡礼、(6)神秘主義の項目を設けて検討をした。

II 章では、子どもと信仰をめぐる彼女の見解について、(1)子どもに信仰心を涵養する上での親の留意点、(2)子どもに向けた親の信仰教育の項目を設けて検討した。

III 章では、彼女の信仰（教育）観の特徴に関して考察を加え、(1)信仰（のあり方）をめぐる、彼女自身の信仰上の立ち位置、特定の宗派、あるいはこれが包摂する教義に拘泥することなく、中庸を保って抑制的に論を展開していること、(2)信仰（生活）のあり方は唯一無二でなく、各人の判断・選択にゆだねられると認識していること、(3)親が子どもの信仰教育を行うにあたって、子ども自身の特質や発達段階を斟酌する必要性を訴えていること、(4)信仰（生活）や信仰教育に際しても、子どもの実体験や具体的な事物を媒介させて物事を感覚的に把握させることの重要性を唱えていることを指摘した。